

## 心理学シリーズ S. フロイト編 <その4>



2005. 11.15

タツノオトシゴ

フロイトの世界も、そろそろ終章に近づき、タツノオトシゴも何となく『ホッ！(^-^)]』としていま  
す。夏休みの宿題も終わり、物寂しげな秋の気配が……(日毎に寒さが感じられます)  
今回の締め切りが、何故か結婚記念日でした。うちのものに言わせますと、うさおさんのイメー  
ジがしっかりと残っています。「アッ！あの人ね。初対面の私に、とても親切にしてくれたわ！」  
他の人より長く言葉をかけ、しっかり手を握ってくれたそうです。(うさおさんの特技かもね)

ところで、先日ある集会で全盲の人(Aさん)とお話する機会がありました。その中で、夢に  
関する話が出てきたので、皆さんにご報告します。Aさんは2歳のときに医療ミスで失明したの  
ですが、小さいときの記憶はなく、ほとんど生まれつきの全盲と変わりません。物心付くころで  
すと、色彩や形に対する記憶が残りますが、その場合は失明による心理的な「ショック」も大きく  
残ります。この「ショック」を克服することを『障害の受容』と言います。ある程度の年齢になっ  
てからの受容は、中々難しい問題を抱えています。『五体不満足』で有名になった乙武さんは、  
先天性の肢体不自由者なのであんなに明るく振舞えるのです。話を戻しますが、Aさんによる  
と、「その人の声を聞けば、ある程度のイメージがつかめる」のだそうです。(当然、長い訓練と  
経験がものを云います)色々な話が進む中で、『雲』についての話がありました。Aさんには、  
色に対するイメージというものがありませんから、実際に手で触れられないものを理解するのが  
大変です。「ある人から『綿菓子に空に浮かんでいるようなもの』と説明されたけれど、自分では



納得できないんです」と仰っていました。(多分、ベト  
ベとした触覚の違いを言いたかったのだと思います)  
また、『雪』の話も出てきました。これは手で触れます  
から、冷たいという感覚は理解できます。そして解け  
てなくなるので、「透明」というイメージを持たれている  
ようで、その二つが同じような色で、もともになる「水」が  
共通点であることも腑に落ちない様子でした。そのあ  
とで「私も夢をみますが、皆さんにはそのイメージが  
全く理解できないでしょうね」と仰っています。「まった  
く映像がなく、音やその他の感覚だけですから……」  
(こういう体験ってちょっとショックですよ！全く理解  
できない別の世界……当事者本人にしか解らない世  
界です。)

同じように全盲のBさんのことを思い出しました。Bさんは15歳の時に事故がもとで失明しています。50歳過ぎの方でしたが、以前お手伝いしたデイサービスセンターへご夫婦で利用されていました。奥様も生まれつきの全盲ですが、日常生活では奥様がリード役で、ご主人が後からついて歩いておられます。「この世界では私の方が15年先輩ですからね！」となんとも頼もしい限りです。ある日、ご主人が私のそばに来て話しかけてこられました。



小声で「私の今日のネクタイは、服装とマッチしていますか？」奥様はちょっと離れた場所で、他の人とおしゃべりをしています。ご主人には色とかファッションに関するイメージが残っています。しかし、奥様にはそのイメージが解らないので、気兼ねしながら私に聞いてくるのです。私も小声で、「大丈夫ですよ、奥様の選ばれたネクタイは良いセンスで

すよ」と伝えました。その時、向こう側での会話がふと途切れ、奥様の耳が“ぴくっ”と動く気配がしました。ご主人は静かに「ありがとう」と言いながら戻っていかれました。

昔のことですが『暗くなるまで待って』という題名の映画がありました。主演女優のオードリー・ヘップバーン扮する視覚障害者が、照明を消した闇の中で晴眼者の犯罪者を相手に、サスペンス溢れる演技を見せていました。(古いネタでごめんなさい)住み慣れた自分の家の中では、夜の暗闇の中では盲目の人の方が自由に動けまわれるのです。眼の見えない分、他の感覚器官(特に聴覚)が発達します。先ほどの例では、それに『カクテルパーティー効果』がプラスされています。雑音の中でも、自分に関係する音を聞き分ける能力です。これと逆なのがBGMなどの『マスキング効果』です。アレ！いつの間にか、うさおさんの領域に入ってしまった。“音と心理学”これもタツノオトシゴの領域なので～す。

さて本題にもどり、S.フロイトの続きです。フロイト以前の代表的な心理学に「行動心理学」があります。行動心理学の特徴は、『人間もまた動物の一種』という発想から研究を行っているところです。フロイトは、あくまでも『人間と動物の違い』に拘っていますので、一度おさらいをしておきましょう。では、「人間と動物の差はどこにあるのか？」という課題についてです。『動物は、本能に従って正しく行動している』ことを前提にすると、『人間は、どうも違うようだ』と考えたのです。『本能』という、“本来、遺伝子に書き込まれている情報”が、何故プログラム通りに動か

ないのか？そこでフロイトは次のような仮説を立てるのです。「何らかの理由で、人間の本能は壊れてしまったのではないだろうか？」(フロイトは、理由についてまでは言及していませんが) タツノオトシゴの好きな説は、「人間は生物学的に見ると、ほかの動物と比べて『未成熟(未完成)』の状態生まれてくる。その方が適応力に勝るから、生きていくための手段として自然に備わったものであろう」という、幼形成熟(ネオテニー)説です。周辺状況を見て、適切な対応が出来る要素を備えているということなのでしょう。魚の種類でも、幼魚のうちにはオスからメスへ、メスからオスへと雌雄変化する種類があります。一体どのような情報が組み込まれているのでしょうか、まだまだ解明されていない部分がありそうです。当然ですが、全く違う説もあります。「大脳ビックバン説」と言われているもので、説としてはこちらの方が有名かも知れません。それは、人間が直立歩行を始めたことが原因だとしています。直立を始めたことにより、頭の部分の重量をより一層しっかりと支えることが可能となりました。それで、「脳の容量が増大し、新しい機能を受け持つことの出来る部分が発達した」という所までは理解しやすいと思います。しかし、その事が原因で、「脳の本来ある部分が一部破壊された」という説明には一寸抵抗があります。それは別としてS.フロイトの精神分析では、この壊れた本能のことを『欲動』と呼んでいます。

人間には、壊れた本能に代わるものとして「こころ(意識と無意識)」が必要でした。そして広い意味で、全ての人間が「心の病」に取り付かれる原因がここにあるのです。そうすると、こんな反論が出てきます。「動物にも心があるではないか！」当然ですが「本能に従って行動する」のが動物であり、その行動を見て「こころ」を感じる場合もあるのではないかと(ライくん、同意の頷き・・・)しかし、それは人間の心を動物に投影させているにすぎません。人間は動物だけではなく、「木や岩や雲など」にも「こころ」があると考えたりもします。(アミニズムなどはその典型でしょう)



このように「こころ」を持った人間は、他の動物たちとは違ったパターンの生活を始めるのです。氷河期の時代に誕生したと言われている人間は、外的から身を守るために“火”を使い暗い洞窟の中に彩色を施した絵(ex.仏ラスコーの壁画など)を残しています。何の目的で描かれたのかは不明ですが、それは躍動感に溢れています。狩の仕方を絵で表したとも、獲物が多く手に入るよう願望したとか諸説があります。全く違う動機だったのかも知れません。S.フロイトは、それら芸術

作品は『人間の無意識』から生まれたものと考えています。そして色々の作品を精神分析の手法で解釈していることは、前回にも紹介しました。その後、芸術に限らず文学、民俗学、宗教、その他あらゆる分野にまで研究対象を広げていったのです。

レオナルド・ダ・ビンチは無神論者であったと言われていますが、フロイトによればそれは、彼が父親を尊敬していなかったことと関係しているのです。レオナルドが幼かった時、父親はレオナルドの母親を捨て別の女性と結婚しています。さらに又別の女性と結婚し 12 人の子どもをもうけたのです。レオナルドが 50 歳過ぎに父親は亡くなりますが、「父親への否定」が「宗教への依存を断ち切っている」と解釈されています。前回の「モナリザ」については、その後描かれた「三人連れのアンナ」（別名：「聖アンナと聖母子」）との関係が注目されています。この絵に描かれた二人の女性は、モナリザと同じような微笑を浮かべています。レオナルドには、実の母親の記憶がかすかな思い出としてしか無く、育ての母親との関係（記憶）をこの絵が表しているのだと解釈しています。



C.G.ユングと S.フロイト、同じ夢判断でも『夢』の捉え方が違ってきます。ユングの夢判断では、言葉の持つイメージを大事にしています。フロイトは言葉の持つ『音』に注目しています。言語には、記号表現(シニフィアン)と記号内容(シニフィエ)という二つの要素があります。動物の鳴き声を表すには記号表

現を用い、動物の呼び名を表す場合は記号内容を用います。(ex.ワンワン&いぬ) 子どものころは、犬のことを「わんわん」と呼んでいませんか？フロイトは言葉の『音』に注目をしていたのです。このあたりはタツノオトシゴも研究中？ですが、先はまだまだ長くなりそうです。

ここで、タツノオトシゴが普段見ている『夢』を振り返ってみます。子どもの頃は、洞窟とか森の中の隠れ家(イメージとしてはトトロの世界)などの夢をよく見ている。しかも天然色です。宮崎監督の作品が大人にも共感を呼ぶのは、そのあたりに理由がありそうです。山火事や恐竜など、恐ろしいものが色々出てきました。「怖いものに追いかられる」というのは、子どもの夢では共通の内容です。筋書きも単純

で、分かりやすいストーリーなので案外記憶に残ります。ところが、大人になってからの『夢』はそんなに単純ではありません。訳の分からないストーリーなので、メモしておいて後から思い出すのも至難の技です。部分的には天然色ですが、あまり輪郭が明確ではありません。私だけのことかもしれませんが、「音」なしの世界がほとんどです。夢の中ではちゃんと喋っていたり会話をしているのですが、その時の音に関する記憶が残っていません。動物が出てくることは少なく、植物の方が圧倒的に多く出てきます。嗅覚はあまり働いていないようですが、触覚の方が記憶に残り易いのでしょうか？暑いとか寒いという感覚はしっかりと残ります。（それって、寝冷えの時では？）最近は少なくなりましたが、高いところから落下する夢はよく見ました。変わったところでは、夢から覚めた夢や、夢から覚められなくてもがいている夢などもあります。



フロイトによれば、「夢は願望の充足である」との解釈が成り立ちます。昔からの言い回しで、「ライオンがカモシカ(獲物)の夢をみる」とか「ガチョウがトウモロコシ(餌)の夢を見る」ということも、『願望』という意味から理解しやすいのでしょうか。『夢』の解釈についても、「夢は無意識の中にある抑圧されたものが形を変えて現れたもの」そして「本人の個人史を知った上で、本人の思い出すことや連想する事を聞きだすことから、その意味を探っていく」という事が重要なポイントなのだそうです。

1938年、フロイトの住んでいたオーストリアは、ナチスドイツの支配下となった。

ヒトラーは「精神分析」を危険思想として禁じ発禁処分とした。国際的に評価の高かったフロイトに対し、各国から「フロイトを救え！」というメッセージが出され、その年の6月にロンドンへの脱出に成功した影には、ナポレオンの子孫であるマリー・ボナパルトがいた。彼女はフロイトの弟子として、フランス精神分析界の重鎮となっている。無事ロンドンに亡命したフロイトは、翌年世を去っている。(モルヒネによる安楽死…)

参考文献『フロイトの精神分析』鈴木晶 ナツメ出版企画

画像はタツノオトシゴのオシゴト場所です。